序

私があるということ

われわれはどこから来たのか？　われわれは何者なのか？　われわれはどこへ行くのか？

これは19世紀フランスの画家のゴーギャン（1848-1903）の晩年の大作のタイトルですが、これから哲学を学ぼうとする人にとっては、哲学とはこういう問題に答えることができるような内容を含む学問ではないかと、漠然と想像しているのではないでしょうか。かくいう私も例に漏れず、大学に入学した当初は、哲学という学問分野に何か深遠な答えを見出せるのではないかと期待していた一人でした。

ところが、実際に哲学書を繙（ひもと）いてみると、このあと第1部で触れることになるヘーゲルの『精神現象学』のように、独特の用語で、かつ何が書かれているのかまったく見当のつかないものに出会ったりしたものですから、この時点で哲学に見切りをつけそうになりました。実際、私の大学の頃の友人の一人はこれで哲学書を読むのをすっかり諦めました。

しかし、難解な哲学書を読まなくなった友人たちも、人生いかに生きるべきか、とか、世界を説明する根本的な原理とは何か、といったような問題に対して自分なりの答えを見つけようとする気持ちは十分すぎるほどありましたので、私もそういう友人たちと文学や芸術につ

いて、なんだかよくわかっていないまま熱く語り合ったことは、青春のちょっとこそばゆい思い出の一コマになっています。

そうした友人たちもまた哲学にはその種の問題に対する何らかの答えが書かれているだろうという見当はついているので、哲学についてはこれを敬して遠ざけるという形で距離を取りながら、人生上の深い問題についてはむしろ結構な割合で、文学や芸術がもたらしてくれる感動を通じて接近しようとしていました。私もジャズの魅力に取りつかれ、楽器の練習と様々なジャンルの本の乱読に明け暮れていました。こうして哲学書はしばしばあまり読まれないまま本棚を飾るだけになったりするわけですが、私のような諦めのよくない人間は、大学院に行ってまで、こうした難しい文章を我慢して読み続けていました。そうこうするうちに、この手の本の読み方のちょっとしたコツのようなものがわかってきました。これは後に述べますが、西洋古典音楽の交響曲を聴くうちに、演奏の善し悪しだけではなく、指揮者やオーケストラの個性がわかるようになるのと通じるところがあります。

それで、私とは？

さて、冒頭に戻って「われわれはどこから来たのか……」ですが、フランス語では特に思想家たちが「われわれ」という人称代名詞を謙遜の意味で「私」の代わりに使う場合があると、当時フランス語のY先生から教わったことがあります。おそらくここでの「われわれ」も「私」と置き換えてもよさそうです。それでは、私とは一体何なのでしょう？近代哲学の創始者とされる17世紀フランスのデカルト（1596-1650）は「われ思うゆえにわれあり」という表現で、その私が考えることを

学問の基礎に置こうとしましたし、それは哲学としてそれなりに紆余曲折を経ながら、科学の発展へとつながっていきました。

私とは何なのか。私があるということはどういうことなのか。そもそも「ある」ということはどういうことなのか、そして、それを私が何なのかと問いかけることは何なのか。こういった疑問は、疑問文である以上、言語というものがなければ問うことすらできない一方で、今ここに私がありさえすれば、他に何の予備知識がない学生・生徒でも発することができます。その意味では、この問題は一般に人類が言語を使い始めたと言われる7万年前あたりからずっと問われ続けてきたものではないかと思われます。

この〈私の存在〉という疑問に答える最初のものはおそらく神話や宗教だったはずです。世界のどこに行っても創世神話があり、人は人知を超えた存在が造った存在であったり、いずれは天国や涅槃（ねはん）の境地に行けるものであったりする話は、人間存在に対する疑問への有力な答えの一つではありました。

実際、西洋哲学の始まりの時代にいたソクラテスも神との交信をきっかけに世の人びとに問いを投げかけ始めたことが知られています。中世のキリスト教の影響の強い時代ではもちろんですが、理性を中心に考え始めた17世紀のデカルト、18世紀のカント、19世紀のヘーゲルも決して神から離れようとはしていません。むしろ個人的には熱烈と言っていいくらいの信仰を持つキリスト信徒でした。

古代ギリシアで生まれた西洋哲学は、中世のキリスト教神学との緊張関係の中で発展してきましたが、学問としての特殊用語や論証の形式もまたプラトンの弟子のアリストテレスのときから確立し、洗練されてきたため、これもまた哲学の門外漢にはかなり高い壁となってい

ます。いきなり「実体」とか「カテゴリー」とか言われても途方に暮れるだけでしょう。言われている内容はおそらく高尚なことなのでしょうけれど、最初のページから何が書かれているのか皆目見当がつかないという状況が起こってしまいます。

考えるということ

私が考える対象がほかならぬ「私」であり、その私を含む世界が「ある」ということについての誰もが不思議に思う疑問から始まっていたはずのものが、謎の用語と込み入った論理により、とんでもなく読みにくい哲学書として現れてくるのは、やはりかなり理不尽なことではないかと思われます。ソクラテスは街中でいろいろな人と話をしては、対話の中で考えていたようですが、著作は一冊も残していません。最初の哲学者は考える人ではあっても、書く人ではなかったのです。そして、それだけで十分哲学なのです。

哲学で大切なことはまずは考えることです。ただし考えるといっても、一人で山にこもって沈思黙考するのではなく、ソクラテスがそうしていたように、**自身の考えを人びとの間で共有し、応答を重ねながらまた考えること**が求められてきました。著作はもともとそうした考えることを再現する手段の一つに過ぎませんでした。ソクラテスの弟子であるプラトンも、師匠を登場人物とした多数の対話篇を残していますが、書かれたものよりも生きた人間の存在のほうが何倍も面白いと考えていました。あの対話篇がソクラテスの思想と人となりを活写して余りある著作であることは論を俟ちませんが、プラトン本人の自己評価は必ずしも高いものではなかったようです。

科学としての哲学

しかし、プラトンの弟子のアリストテレスが哲学を学問として体系化していくにつれ、著作物の地位は変化し始めます。実際、故人の思想の手がかりはその著作物しかなくなっていくわけですから、著作物はあらためて学問的分析対象としてその地位を高めていくことになります。もちろん、これはこれで学問の立場としては自然な成り行きではあるのですが、ひとたび学問化されてしまうと、先人の著作を解釈し、その概念や理論の整合性の分析に終始するだけで息切れして、自分で考えることにまで行き着かないといったことが起こってきます。そこでは何らかの知的作業が行なわれているのは確かですが、そこから〈考える〉という要素が抜け落ちてしまっているということが、哲学に限らず、学問の世界ではしばしば見られます。考える部分は自分の師匠の学説のオウム返しでなければ、学界の定説または学派の主張を墨守することに置き換えられています。

結果的に、アリストテレス以降は学術的なスタイルの著作物が主流となって今日に至ります。こうしてこれから哲学を学んでみようかという初学者の目の前には難解な哲学書の山がそびえ立っているというわけです。

しかし、繰り返しますが、哲学とは考えることであり、哲学書を読むのはあくまで考えるための手がかりを得る方法に過ぎません。読む場合は大家の御高説をひたすら拝聴するのではなく、著者と対話をしながら読んでいく姿勢が必要となります。哲学者もまた読者と対話をしながら考えを紡ぎ出していくのが本来のあり方のはずです。

哲学は今日では大学という場所において、学問的というか厳密な科

学としての鎧をまとっているために、本来の「考える」というあり方が忘れられがちです。実際に大学という場所では学説や思想の研究者として哲学を教えている人がいるわけですが、そういう人が全員オリジナルな哲学者であるとは限りません。それは中学や高校の保健体育の先生が皆現役の競技者でないことと同じです。

哲学のトップアスリートというのはソクラテスのように街中で誰彼なく相手を見つけては議論を楽しんでいるような、どちらかというとおかしな、というかちょっと危ない人だったりします。実際、その思想が若者への悪影響をもたらすという理由で死刑判決を下されたりするような人でしたので、大学に収容できればまだいい方です。

しかし、大学で哲学を学ぼうとする人にとっては、各大学に必ずしも現役のトップアスリートのような哲学者がいるわけではないので、多くの場合、たまたまお世話になる哲学研究者の先生の教えを受けながら、哲学書の山の中に確実に存在している真の哲学者を探し当てることから始めなくてはいけません。身近なところに哲学者がいなくても、過去の書物の中には確実に存在しているからです。そして、大学の研究者ならば、本人が哲学者でないとしても、少なくとも誰が真の哲学者なのかということについては哲学の門の前に立つ皆さんよりはよく知っているはずです。

たとえば「後期ヘーゲルにおける理性概念の変遷」（仮題）といった研究をしている先生は、少なくともヘーゲルについては皆さんに熱く語ることができるでしょうし、思想史を専門にする研究者でしたら、そこで取り上げる哲学者の思想の魅力についての血湧き肉躍る歴史物語として語ることができるはずです。

文芸としての哲学

もっとも、これが芸術だったなら、芸術作品と芸術理論、芸術史、芸術評論はそれぞれはっきりと区別できますし、誰が芸術家なのかという点で迷うことはありませんが、哲学の作品は言語で書かれているうえに、先人の哲学者の業績を意識して理論展開されたりすると、理論と歴史と評論が渾然一体となったものであったりします。作品の形式もプラトンの対話篇のように登場人物の会話で書かれたものから、いわゆる学術論文形式のものもあり、エッセーもあれば、一文ずつの断章形式になったものもあります。

哲学を独学で学ぶ場合は、こうした書物をとにかく読んでいくことしか方法がないのですが、大学で哲学を学ぶ場合でも、大学教員という少なくとも哲学が何なのかを知る先生の導きによって、こうした書物の森に入っていくことになります。さらに大学院で専門的に哲学を学ぼうとするときには、ほぼ例外なく英独仏、ギリシア語、ラテン語等の外国語の原書購読という形を取ることになると思います。そこで学ぶのは外国語の読解作業を通じて哲学者が思想を紡ぎ出す創造の現場を追体験することです。日本の大学で、哲学が伝統的に文学部に置かれているのも、授業形態としては収まりがいいところがあります。

このような学習環境の中で、担当の先生が幸運にも正真正銘の哲学のトップアスリートであった場合についても事情は同じで、原書購読という伝統的方法は変わらないでしょう。というのも、師匠の導きにより虚心坦懐に文章に向き合うことで、書物の中の先哲と出会い、また、師匠の読み方から多くのものを学ぶことができるという点で、この方法は哲学的思考の最も有効なトレーニングとなりうるからです。

なお、師弟関係の中での学びということについては、このあとの章でもあらためて触れることになると思います。

本書の構成

本書は大学での哲学講義をもとに、哲学者たちの思想を解説したものです。ソクラテスに始まる哲学者たちが、今日に至るまでどういうことを考えてきたのかということを、基本的に年代順に述べていきます。ただし、ソクラテス、プラトンから現代哲学に至るまでの哲学者の思想をただ抽象的に要約するのではなく、彼らが実際にどのように考えたのかということをその代表的なテクストの一節を通して向き合います。そうすることで、彼らがどんな問題に取り組んでいたのかということを、彼らの言葉を通じて皆さんと共有することを意識しています。翻訳ではあっても原著者の文章に少しでも触れることを通じて先人のものの考え方を共有してもらえればと思い、こういうスタイルをとってみました。